



城

ありおかじょう

第三十九回 有岡城

～人間臭すぎる男の城～

山本 忠博

織田信長はよく家臣に裏切られた人です。その多くが唐突で、信長自身は、なんで裏切られたのか、よく解っていない感があります。主だった者を順に挙げれば、実弟のぶかつの信勝と重臣しばた かついえの柴田勝家、はやしひでさだ林秀貞に始まって、義弟あざの浅井長政、二回も裏切っているまつながひさひで松永久秀、そしてあらかみむらしげ荒木村重と続き、最後にあけちみつひで明智光秀になります。

今回は、最後から二番目の荒木村重に注目して、彼の本拠地だった有岡城をご紹介します。

村重の成り上がりの前半生

村重は、せつづくに摂津国（現在の大阪府北中部と兵庫県南東部）の池田城（現大阪府池田市）の主である池田氏の家臣の家に生まれました（1535年）。

村重が最初に仕えた池田家の当主は、なかなか有能な人物だったらしく、織田信長が後に足利将軍となる人物を奉じて上洛してくると、信長に重用されて摂津守護に就任しています（1568年）。この当主は、信長が義弟の長政に裏切られた際の撤退戦（金ヶ崎の退き口：1570年）でも、主戦力として活躍しています。

さて、村重ですが、この当主に叛きます（1570年）。叛いたのは、村重一人ではなく、池田家中の反信長派で、池田一族（一説に当主の弟いけだ きゅうごえもんの池田久左衛門や、なかがわきよひで中川清秀といった実力者達が加わっています。当時の機内の諸勢力は、どこも似たような状況で、日の出の勢いの信長に一旦は従ったものの、浅井長政の離反を皮切りに信長が四面楚歌になると、反信長勢力に鞍替えする家は少なくありませんでした。

村重達は先の当主を池田城から追い出して、その後は、多頭政治の状態で池田家を取り仕切ったようです。この間に、村重は、摂津の信長方と戦いながら勢力を伸長させ、

信長も無視できない存在になっていきます。

摂津の混乱が一応の収束に向かうのは、信長がいよいよ足利将軍家を潰しにかかった時です。この時、池田家は将軍家側に着きました。ここで、村重は信長に寝返ります（1573年）。その後、信長が足利将軍を追放し、室町幕府が滅亡すると、池田家は没落しますが、村重はその混乱に乗じて池田家を掌握し、乗っ取ってしまいます。村重は、上述の中川清秀を家臣とし、さらには、主家筋の池田久左衛門に荒木姓を与えて、家臣の列に加えています。完全に主従が入れ変わってしまったわけです。

村重の役割

村重が信長に寝返った際のエピソードとして、次のものがあります。村重が信長に謁見したときに、村重は「私に任せてくれれば、摂津は平定してみせます」と言いきました。すると、信長は刀を抜き、側にあった饅頭を突き刺して、村重に突き付けます。村重は動ぜず、刀の先の饅頭にかぶりつきました。信長は、村重の剛胆さを気に入り、摂津の切り取りを任せたといいました。伝説の城を出ない話とはいえ、村重の性格や信長との関係、与えられた役割を端的に表しています。

さて、摂津を平定することの重要性とは、何だったのでしょうか。それは、摂津国内にあった、反信長勢力の筆頭格である石山本願寺を、抑え込むことと、信長軍が西国に侵出する足掛かりとすることでした。

村重は、摂津の反信長勢力と戦い、その過程で、敵方いたみじょうの伊丹城（現兵庫県伊丹市）を落とします。そして、この城を改修し、有岡城と改名して、本拠地としました。村重は、摂津を大方平定した後も、石山本願寺攻めや西国侵出で、よく働いています。

村重の謀反

織田軍団の中で、かなり働いて武功も重ねた村重ですが、摂津の西に隣接する播磨国に出陣中に、突如として有岡城に戻り、謀反を起こします(1578年)。謀反の直接の原因はよく判っていません。一説に、中川清秀の家臣が信長に敵対する石山本願寺に兵糧を横流ししていて、その咎めを恐れたためといえます。ただ、村重自身は謀反に乗り気ではなかったようで、信長側の翻意を促す使者に応じて、一旦は信長の許に釈明に行こうとしています。しかし、中川清秀に説得されて、信長への謝罪を断念し、有岡城に1万の兵で籠城することになります。

筆者の個人的な見解ですが、おそらく、信長に扱き使われて戦につぐ戦で、疲弊した家臣団に不満がたまり、家臣団の一定の総意として、村重は謀反を起こさせられたのだと思います。状況としては、村重達がかつて池田家に叛いたときに似ており、不満を持った家臣達に、かつての池田家の当主は追放され、村重は逆に引きずり込まれたのでしょう。村重が信長の許に向っていれば、彼は追放されていたと思われます。

有岡城の戦い

この時の天下の情勢としては、信長包囲網は崩れたとはいえ、摂津で石山本願寺が信長に抵抗を続け、中国地方の毛利がそれを強力に支援していました。これに村重が加われば、信長の西国侵出が頓挫する可能性は、十分にあったといえます。

信長は、自ら5万の兵を率いて出陣し、それと同時に村重方の切り崩しにかかりました。その結果、謀反を強硬に奨めたはずの中川清秀が信長に寝返り、村重は梯子を外された形で孤立します。それでも、村重は、毛利の救援を頼みに、降伏を拒み続けました。

村重が籠った有岡城は、現在のJR伊丹駅からほぼ阪急伊丹駅にまで達する大きな城でした。当時としては珍しく、町を堀と土塁ですっぽり囲んだ惣構そうがまえという構造を有しており、これは、現在確認できる最古の惣構であるといわれています。

これだけの堅城になると、5万の兵でも攻めきれず、初戦において信長側に大きな損害が出ました。さらに、村重は、信長から指揮を継いだ信長の息子の陣を急襲し、村重強しの印象を信長側に与えました。こうなると、信長方もうかつに手を出せず、戦いは膠着状態に陥りました。

そんな中、初戦から10ヶ月ほど経った頃に事態が動きまゝす。村重が、わずかな供回りのみを連れて有岡城を抜け出し、別の城に移ってしまったのです。この行動は、一族郎党を置き去りにして逃げたともいわれますし、また、いくら待っても救援にこない毛利に交渉に行くためだったともいわれ

ています。いずれにしても、城主不在の有岡城の守りは弱体化し、内応者が出て、徹底抗戦も難しくなり、留守を預かっていた久左衛門が開城を決意します。久左衛門は、信長方との交渉で、村重の籠もる城を開城させれば、荒木の一族郎党の命は助けてもらえるという約束を取り付け、村重の許に向かいます。しかし、村重は開城を拒否しました。そのため、久左衛門は窮して行方を暗ましてしまいます。こうなると取り残された有岡城の人々は万事休すで、村重の一族や重臣、それにその家族の、合わせて6百名以上が、ことごとく処刑されるに至りました。それでも、村重は戦いを止めず、最終的に毛利に逃げおおせました。城兵の命と引換えに城主が腹を切るという美学は、当時からあったわけで、この美学からは、彼の行動はかなり外れています。

それでも生きる村重

時は移って、信長亡き後の秀吉政権下の堺さかいに、荒木村重の姿がありました。晩年は、茶人として生きています。千利休等の一流の茶人と交流を持ち、後世においては「利休十哲」(利休の高弟10人)と呼ばれたりもします。それで、村重は、悔い改めて人格者にでもなっていたのかというと、そうでもありません。有岡城の戦いの時の恨みから、かつての臣下を讒訴したり、秀吉の悪口を言ったあげくに、秀吉の怒りを恐れて出家したりしています。どこまでも、人間臭い人です。享年は52です(1586年)。ちなみに、村重には、有岡城から救い出された息子がおり、この子は、後世に浮世絵の始祖と呼ばれる高名な絵師になっています。

現在の有岡城

有岡城は、惣構そうがまえの価値を認められて、国の史跡に指定されています。現在のJR伊丹駅が、かつての主郭の中に存在する状態なので、その遺構が破壊されているともいえますが、別の見方をすると、伊丹駅を降りて直ぐに史跡にアクセスできるので、交通の便は最高といえます。近畿方面に出向く機会があれば、電車でふらりと訪れてみてはいかがでしょうか。



有岡城跡(有岡城跡史跡公園)